地熱

稲沢潤子

新日本出版社

地熱

稲沢潤子

新日本出版社

稲沢　潤子（いなざわ　じゅんこ）
1940年東京に生まれる
日本文芸家協会会員　日本民主主義文学同盟員
主な著書『紀子の場合』『星の旅』『風の匂う野』『冬草の萌え』（以上，東邦出版社）『涙より美しいもの』『夕張のこころ』（以上，大月書店）『いのちの肖像』（労働旬報社）

地　熱

1986年7月30日　初　版　　定価 1800円

著者　稲沢潤子
発行者　松宮龍起

郵便番号 151　東京都渋谷区本町1の8の7
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（320）7111（代表）
振替番号　東京 3－13681
印刷　亨有堂印刷　製本　小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01438-1 C0093

地熱目次

溪谷の街　7
遺　体　17
暮れなずむ谷　48
黒い片隅　75
白いズリ山　101
選　挙　131
炭山祭り　156
パンツァーコンベア　185
南部鉱　212

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

事故　242
紅葉の街で　268
降る雪に　296

装画　熊谷守一

地

熱

『赤旗』一九八五年三月三日～九月六日連載

渓谷の街

夕張は谷底の街である。

街を貫いている一本の道は、谷底へまっしぐらに降りるかと思えばゆるやかにはいあがり、はいあがっては山すそに消え、細長い山間を縫いながら、南北約三十キロにわたって伸びている。

狭い谷底に市街地が並び、山の急な斜面に炭住がぎっしりとへばりつき、街と谷川と鉄道と道路とが、もつれあい、まじりあいながら谷を縫って南へくだってゆく。

蝦夷地が北海道と改名されたのが明治二年、それから二十年後、この山岳地帯に石炭が発見され、以来九十年近く石炭とともに栄えてきた。ここは炭鉱の町である。

ズリ山と谷と黒い川の街。街がはじまって九十年のこの山間部では、たかだか三代さかのぼれば、人々の歴史をあらかた語ることができる。

それ以前、ここは鹿の住む渓流地であった。おもかげは今でも、街の北部に架かる橋の上でしのぶことができる。渓谷をつなぐ大橋は、全長百メートルにおよび、橋に立ってのぞきみれば、目もくらむようなはるか下を谷川が渦をまいて流れている。

石炭があるからそれを掘る人間が住む、そんな山間の街である。

春。五カ月ものあいだ、山をおおい、軒にうずたかく積もった根雪がとけはじめると、谷川は水量

を増し、岸の重い雪を嚙んで、どうどうと音高く流れはじめる。
人々は重い冬の衣服をぬぎはじめ、軒下に積もった雪をスコップでおこしては谷川の支流に流しにゆく。一刻も早く黒い土の匂いを嗅ぎたいのだ。その欲求につきうごかされて、人々はこまめに動きまわる。
橋のたもとの商店が密集するあたりでは、入口の引き戸のガラスに次のような貼り紙が出される。
「つららにご注意ください」
「頭上にご注意ください」
頭をあげると、軒からはおとなの腕くらいの太いつららが、幾条もぶらさがって鋭い切っ先を地面に向けている。それは透きとおって、きらきらと陽にきらめく。そのなめらかな透明さ。つららの向こうの空は、もはや灰色ではなくてつきぬけるような青だ。
雪どけのぬかるみの季節が過ぎると、やがてあたりがけむるように薄い色彩を帯びてくる。灰色から緑の世界へ、山の空気ははげしい寒暖の差をくりかえしながら、着実に生きるものの季節に向かってうごいてゆく。空気は日ごとに甘く匂う。
くまざさの根もとに濃い緑のこごみ。雪に押しつけられていたくまざさは、淡い風の一吹きで、ぴーん、ぴーんと音たててはねあがってくる。たんぽぽのかたいつぼみ。
花の季節がやってくると、谷の切りたった崖淵に、花びらの小さい淡紅色の山桜が咲き、こぶしがかすみのように咲く。
土手にたんぽぽ。斜面の庭にビロードのような真紅のチューリップの群生。水仙が咲き、紫つつじが満開となり、黄色のれんぎょうが斜面をいろどって風に揺れる。
夕やみに浮かぶこぶしの白い花は、純白のクレパスで春の宵に清楚なしるしをつけたようだ。ぽか

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

りぼかりと闇に浮かぶ。
そして初夏。山々はいっせいの、したたるような緑である。
山の木々は、それぞれに表情をもっている。斜面に、黒い幹の木が、わかわかしい緑をつけてあらわれるかと思うと、その背後にはやさしいみどりが、あちら向き、こちら向きに、透ける葉を風にそよがせる。
白樺の緑はういういしくて、一夏じゅう、その梢になにかの花のつぼみをつけたようである。
日がかんかん照る。

国近宗雄の家は、輸車路を見おろすズリ山台地の上にあった。
山の斜面にまるで表土の堆積のように、台地に幾何学模様の横じまを描く、長屋群の一つである。
石炭を掘ったあとの石屑や石炭殻を、九州ではボタと呼ぶが、東北以北ではズリと呼ぶ。ここはもと、自然の地山だったのを、ズリを積んで山をせりだし、その上に住宅を建てたものである。
彼の家は六軒長屋の炭鉱住宅の一つで、この台地には、同じような長屋が三十棟ほども並んでいた。その並びの、崖に近いところであったから、窪地の青い繰込所の屋根は眼下に見おろせたし、また谷間を縫う往還が、市街地の果てに消えてゆくのも見ることができた。
表戸をあければ、玄関のすぐ横が台所で、とっつきが六畳間である。
その奥に八畳の居間があり、便所があるほかは、住まいの間取りは、これでぜんぶである。
ただ、宗雄が妻の弘子と暮らすようになってから、台所の横の南の面に、ベニヤで囲った四畳半の外屋(げや)を出した。この家に、宗雄と六つ年下の妻の弘子、二人の小さな子ども、それに宗雄の父の国近尋次の五人家族が住んでいる。

長屋のまえの、路地をはさんだ向かいがわには、掘っ立て小屋みたいな薪小屋がたっている。これは、どの家にも共通のしろものだ。小屋にはストーブ用の暖房炭のほか、冬のあいだの食卓をまかなう漬物桶がいっぱいに収納されている。

その昔、幼かったころ、国近宗雄の記憶にきざみつけられたのは、坑内からまっ黒になってあがってくる父の姿と、それからこの谷ぜんたいが、なにかボロ布のように薄暗かったことである。

最初の記憶に浮かびあがってくるのは、いつも夕暮れの、ボロ布のような風景ばかりなのだ。丘の上にうずくまる自分と、たちはたらくおとなたちと、その背後の黒灰色の世界。

むろん、その後まもなくして、この谷の世界にも日が照り、雪におおわれ、秋には錦の紅葉が山をおおって、魅惑的な木の実が秋の陽射しに輝くのを知ったけれども。

それから三十余年が経つ。十八歳で炭鉱に入った宗雄も、この谷で三十代の半ばを過ぎようとしていた。

古い家だったが、それでも父の尋次が仕事のできる先山だったから、宗雄の家は炭鉱長屋のなかでもよいほうだった。なによりも、繰込所に近いのがよい。台地の坂道を駆けおりれば三分、ゆっくり歩いても五分で行ける。そのかわり、帰りは急な登り坂になるが、慣れてしまえば、そこが坂道とも思わなくなる。なにしろ、この狭くて細長い谷底の町の、どこへ行くにも坂道なのだから。

国近宗雄の家族は、父の尋次の代にこの街にやってきた。それを尋次は、宗雄と妹の昌子の二人の子どもによく語ってきかせた。

尋次は、北海道からは内地と呼ばれる本州の、やはり山間の村に育っている。

生家はわずかばかりの田畑をもつ自作農だった。なんでも、もとはそうとうな土地持ちだったらし

いが、他人の借金の保証人に判をついたばかりに、土地田畑のほとんどをなくしたのである。ものごころついたときには、板庇の隙間から月の見えるような家にいた。

長男であるばかりかたった一人の男の子だったが、尋常高等小学校を出るとすぐ、他家に口をあずけるため、奉公に出された。父親が入婿だったうえ、母親が出奔し、離縁やら復縁やら複雑で、ために彼の口さえ養いにくくなっていたのだった。

それでも高等小学校まで出してもらえたのはありがたいといわねばならない。それは彼が学業成績がよかったのと、長男だったためである。

奉公先は、生家から山二つ越えた、湖のほとりの盆地であった。尋次の仕事は馬や牛、犬の世話、井戸掘りの手伝い、綱引き、土運搬などである。

山間の盆地は、冬になれば足袋がまっ白に凍り、草履の鼻緒も凍って棒のようになった。朝起きると、吐く息で、布団のえりが白く凍っていた。炊いた飯をおひつに移すとき、二、三粒こぼれればたちまち凍ってしまう。

外の仕事をしているからといって、賄いのほうは知らぬとはいえない。やはり手伝わなければならない。鍋、釜洗いから板の間の掃除まで、気がつけば彼の仕事だった。

「他人の飯には骨がある」

奉公に出ると、そういわれたものだ。べつに、ほんとうに骨が入っているわけではないが、昼は主人の威光をかさに着て、十歳の小児にまでばかにされる。

毎晩、家の者が寝につくのは九時か十時だった。家内が寝しずまるのを待って、尋次も寝所に引きとった。読本でもしようと思うのだが、昼の疲れが出て、ねむくてたまらない。

主人は気むずかしい人だったが、女主人はやさしい人だった。かげになり、日なたになりして、尋

次をかばってくれた。ある晩、用事があるからここへすわれ、といって、尋次を部屋に呼んだ。そして北海道への移民をすすめたのである。

「おまえも、この家に二年いても、三年いても、家の財産がどうということはないからいいのだが、毎日馬の世話、犬の世話をしていても、それでは将来、おまえの身のおきどころがない」

もとより、尋次も考えていたことであった。毎日板の間を掃除したり、鍋や釜をみがいていれば、みがく鍋釜には光が出、板の間にも光沢が出て、顔さえ映るようになる。しかし、みがく自分の身はどうであろう。尋次は女主人の助言をきくと、あっけないくらいかんたんに、北海道行きを決めた。尋次が数えで十七のときであった。身元引受け人には、旭川に住んでいる、女主人の縁者がなってくれた。

渡道した尋次の最初のもくろみは、もとより開墾であった。が、根がせっかちの尋次の性分は、広い荒地の開墾のきびしさになじまなかった。くわえて、十七歳の若者のたった一人での開墾はてんから見通しに欠けていた。開墾しやすい土地はすでに人の手が入っており、残っているのは荒れた容易ならぬ原野だった。窮した彼が、最初にやった仕事は、屋台引きの「一ぱい酒屋」だった。箱のついた荷車を調達し、箱の前後に朱で「酒」と書き、横の白いところに「一ぱいや」と書く。自分の顔は鉄面皮と思いきめ、荷車を引いて旭川区内の家々を訪問することにした。酒は一合、二合の計り売り。だが、一軒として買ってくれる家はない。夕方まで歩いて、ようやく一升売るのがせいぜいだった。利益は一升につき十一銭。わらじ代にもならぬ。悪路に車をとられ、石狩川を吹きわたってくる寒風になやまされることもしばしばだった。やがて彼はまだ夜の明けぬ早朝に起きて新聞配達もやるようになる。

早朝、四時四十分の列車で、新聞が到着する。列車が着くのを待ちかまえていて荷をおろし、「小樽新聞」を官舎の各戸に配達する。配達をはじめてから二、三日すると、配達する家の戸口に、「小樽新聞おことわり」の貼り紙がついている。それを、かたっぱしからはがして、新聞を入れていった。

貼り紙をはがして配っていくと、翌朝にはふたたび「おことわり」の貼り紙が貼ってある。それをまた、はがす。貼り紙が用をなさぬとなると、配達の時刻に門口に出てきて、ことわる家もあった。「進呈します。無料進呈でございます」と、配りながら叫び、走りまわった。尋次が子どもらに話したのは、そんな少年時代の思い出の断片だった。

だれでもそうなのだが、若いころの思い出は、もはや体も敏捷ではなく、体力が衰えるにつれてなつかしくなるもののようだ。それは単に、自分がどのような人生を経てきたかを語りつげようためばかりでなく、若いころ、まだ全身がばねのように健康で、元気だったころのことを、自身でなつかしみ、いとおしんでいるのだ。

あのころ、自分は、どんなに潑溂として元気だったか。どんな苦労もいとはしなかった。夢があったからだ。

朝四時半に起きて旭川駅に駆けてゆき、四時四十分到着の列車を待つ。それから三時間かかって雪のなかを新聞を配達し、午前八時に帰宅して朝食、そして「一ぱいや」の車を引いて行商に出かける。

毎日四里の道を歩く。つきさす吹雪が、ガラスの破片のようだった。厳寒の石狩川からは、水蒸気が立ちのぼった。だが、困難がかさなればかさなるほど、身内の希望は熱く燃えさかって、疲れた体

をささえてくれた。健康であること、それが若さというものだろう。

カムチャツカに行った話もあった。東京に本社のある某食品会社に雇われ、五百人の労働者が船に乗せられ、カムチャツカの番屋に到着した。現地の漁場で、いか、かにを捕獲し、缶詰を製造するのである。現地に着くと、まずみんなでにわか造りの工場を建てる。夏期の四カ月間の作業場となるのだったが、カムチャツカは白夜に近く、なかなか日が暮れないので、作業時間が長く、不平不満が増大した。尋次は読み書きが達者だったことや年少であることから、事務所の給仕に職替えされたのだったが、前年が豊漁だったため、三百人の労働者を五百人に増員したその年はさんざんの不漁で、どうにもならなかったこと。

ロシア人の巡回があり、はじめは番屋などに来て酒も飲み、泊っていったりしたのだったが、食品会社が規定を破り、密漁してからは警戒がきびしくなり、番屋に来ても酒も飲まなくなったこと。

それらの話を、尋次は子どもらになつかしげに、ときに無謀な冒険をいとおしむように語った。語調には孤独な少年期への哀調もこめられていた。

だが、母親のハツエは、夫がそのように話すのをいやがった。

「父さんは、自分の都合の悪いことはみんな忘れてしまう」

というのだ。

今は亡いハツエは、夫婦であればこその不遠慮さに冷やかさをくわえていいはなつ。その口調を宗雄はおぼえていた。

「父さん、父さんはいったい何年に北海道にきたんです?」

「昭和のはじめだ」

尋次はくったくなく答える。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.